

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：34602

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520871

研究課題名(和文) 東アジア飾り帯文化の生成過程

研究課題名(英文) The Process of Formation of East Asian Ornamented Belts

研究代表者

小田木 治太郎 (ODAGI, Harutaro)

天理大学・文学部・准教授

研究者番号：90441435

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：東アジア地域に民族・時代を超えて流行した飾り帯を「東アジア飾り帯文化」と捉え、その初現期の様相を明らかにしようとした。既報告の帯金具のデータを集成し、セット関係や出土状態を明らかにした。また中国内モンゴルおよび寧夏で資料調査を行い、個々の帯金具の詳細なデータ(蛍光X線分析を含む)を収集した。これら2つのアプローチによって、中国北方青銅器文化の飾り帯を明らかにし、それが中原側に波及した過程の解明に迫った。

研究成果の概要(英文)：Taking ornamented belts which have been fashionable in East Asia across divisions of ethnicity and time as the "East Asian Ornamented Belt Culture," an attempt was made to clarify its condition at the time of its first appearance. Previously reported data on metal belt fittings were collected, and the relations of sets and conditions of recovery for these data were illuminated. Materials were investigated in Inner Mongolia and Ningxia, and detailed data (including X-ray fluorescence) were gathered on individual items of metal belt fittings. Based upon these two approaches, the ornamented belts of the Northern Chinese Bronze Culture were clarified, closing in on an elucidation of their spread to the Central Plain of China.

研究分野：考古学

キーワード：考古学 帯金具 中国北方青銅器文化 東周・秦・漢 蛍光X線分析 オルドス(鄂爾多斯) 固原
国際研究者交流(中国)

1. 研究開始当初の背景

腰帯は、腰で衣服を留める機能をもつ道具である。ただし人びとは、腰帯の機能をそれにとどめず、装飾を加えて権力を誇示するために用いたり、さらに身分制度のなかで階級を表す道具として利用したりしてきた。現代で言えばボクシングのチャンピオンベルトがその好例であり、また宮中装束における石帯に過去の盛行の名残を見ることができる。

本研究では、中国の東周代並行期以後、東アジアの各地域・各時代に展開した飾り帯を「東アジア飾り帯文化」と呼称して一塊のものとして捉える。この捉え方は、本研究代表者が中国北方青銅器文化をテーマに研究を展開する中で、同文化の帯金具と中国南北朝期の晋式帯金具との関連に注意し、さらに晋式帯金具が起点となって東アジア各地域に飾り帯が広がったという想定を得たことに基づく。

東アジアにおける飾り帯文化の源流を中国北方青銅器文化に求め、総合的に論ずる視点はこれまでなかったと言ってよい。中国北方青銅器文化の帯金具が秦・漢に波及したことはこれまでも注目されてきていたが、議論は装着したときに体の正面を飾る長方形帯飾板などに限られており、飾り帯全体の構成を捉えようとしたものではなかった。

2. 研究の目的

本研究が究極的に目指すのは東アジアにおける飾り帯の変遷の全体像を明らかにすることである。大まかな流れは次のように想定される。東周期の中国北方青銅器文化に行われていた飾り帯が波及して秦・前漢王朝で威信財としての豪華な飾り帯が生じる(第1転換)。三国・晋代にそれをもとに晋式の飾り帯が生成して(第2転換)、南北朝期にかけて発展し、さらに朝鮮半島や日本にも波及してそれぞれに独自の発達を見せる。

7～8世紀に鍔帯が生じて(第3転換)、身分制度を支える重要な器物となる。

ただし幾度か起こる大きな転換について、それぞれどのような過程を経たかはいずれもよく分からない。これらを順に捉えて、東アジアにおける飾り帯の変遷の全体像を明らかにすることが求められる。本研究ではそのうちの前半部分を対象とする。すなわち秦～前漢に中国側の王朝が北方青銅器文化の帯を受け入れる過程をより明瞭にする。これに関連する議論はこれまで帯の一部品である長方形帯飾板の、しかも文様・意匠のみにほぼ留まっていた。本研究では、現地調査を行って帯全体の構成と各部品構造および金属組成などを追求して、第1転換の歴史的・技術論的・文化論的意義を明らかにする。また様相がとくに不透明な第2転換については、既報告資料を検討して、その過程を裏付ける。

3. 研究の方法

目的を達成するために、3項目の課題を設定し、研究を進めた。

(1) 第1転換(中国北方から秦・前漢への流入)における帯金具セットの変容の追求

既報告資料を収集してデータベースを作成する。とくに帯金具がセットで出土した例を重点的に検討し、それらを生産・使用した民族集団・時期を再検討し、変容の過程を明らかにする。

(2) 第1転換における帯金具変化の詳細な追求

中国の内モンゴリアルドルス(オールドス)青銅器博物館や寧夏固原博物館などに赴いて出土遺物の調査を行う。個々の帯金具の構造および文様を詳細に記録し、同時に蛍光X線分析を行って、帯金具の型式学的な検討に加えて製作技術や使用方法を追求する。また国内収蔵資料にも同様の調査を行い、参考とする。

(3) 第2転換(晋式帯金具の成立)における帯飾りセットの変化の追求

帯金具がセットで出土した例を中心に既報告資料を収集し、検討する。

4. 研究成果

(1) 収集したデータ

前節の3項目の課題に対応して、以下のように調査を行い、データを収集した。なお中国北方青銅器文化は東西に長く分布し、大きく、東から燕山地域、内モンゴリアルドルス地域、甘寧地域の3つに分けることができ、それぞれで墓制や遺物の様相が異なることが明らかになっている。以下の記述にはこの地域区分を用いる。

第1転換関連既報告資料のデータ

内モンゴリアルドルスの全354箇所(墓地)のうち135箇所、寧夏の全139箇所のうち39箇所、甘寧の全33箇所のうち19箇所に帯金具関連のデータを見いだした。また燕山地域では全690箇所の墓(墓地)から97個の帯留金具を見いだした。なお燕山地域については帯留金具の抽出に留まり、帯金具全体の資料収集には及ばなかった。

実資料調査

内モンゴリアルドルスの鄂爾多ス青銅器博物館で175点、寧夏の固原博物館などで115点の帯金具関連資料の調査を行った。また国内では天理大学附属天理参考館において70点を調査した。

第2転換関連既報告資料のデータ

前漢代の長方形帯飾板47点を中心にデータを集めた。

(2) 考察の成果

本研究の成果は、研究成果報告書『東アジ

ア飾り帯文化の生成過程』およびいくつかの論文で明らかにした(次節参照)。詳しくはそれらに譲るとして、下にテーマを分けて概要を記す。

帯から見た北方青銅器文化の地域性

中国北方青銅器文化の燕山地域・内蒙古中南部・甘寧地域の以上3地域の帯は、いずれも装飾性の高い帯留金具をもち、帯の上に帯飾を並べて装飾することで共通し、中原側の帯と大きく相違する。帯飾については燕山地域の様相が複雑で検討を深めることができなかったが、帯留金具については、燕山地域では帯鉤が主体であるのに対して、内蒙古中南部と甘寧地域では鳥形鉸具および有鉤帯飾板が主体を占める。鳥形鉸具と有鉤帯飾板は、見かけは大きく異なるが鉤止方法は基本的に同じであり、帯鉤とは根本的に異なる。すなわち北方青銅器文化の帯は、燕山地域と内蒙古中南部・甘寧地域とに二分される。

燕山地域の飾り帯

燕山地域の北方青銅器文化は春秋中期に顕著となり、春秋末～戦国初まで盛行し、その後この地域が燕化するのに応じて急速に衰退する。燕山地域の飾り帯は、装飾豊かな帯留金具に加えて、帯の上に帯飾を並べて装飾する。上述のように燕山地域の帯飾の様相は複雑で十分な検討を行えず、結果として帯全体を論ずるには至っていない。ただし、帯留金具については詳細に検討できた。帯留金具には鳥形鉸具と帯鉤とがあるが、前者はわずかで、後者が圧倒的に多い。帯鉤は、文様が帯鉤の主軸と直交する「横向き」と、文様の主軸と帯鉤の主軸が一致する「縦向き」に分かれ、前者には「単獣系」「群獣系」の2型式(系)が、後者には「鳥文系」「円形式」「台形円文式」「獣面長柄式」の4型式(系)がある。いずれも燕山地域に特有のもので、中原側の帯鉤とは特徴を異にする。

これらの帯留金具のうち、鳥形鉸具は春秋中期に限られ、それ以後には見られない。また台形円文式は春秋後期に、獣面長柄式は春秋末に現れる。このような型式ごとの消長のほか、いずれの器種でも長柄化が進行する変化を把握することができた。また戦国以後は、中原側と同様の帯鉤を認めるのみとなる。

さらに帯留金具の出土状態から、使用方法の復元を試みた。当初、横向き帯鉤はみな文様を正置したときに鉤が使用者の右側になるように設計されているので、当該文化では帯鉤は鉤を右に使用することが基本であったと予想された。現に初期の例は多くが鉤を被葬者の右にして出土している。ただし、この傾向は初期だけであり、その後の例では鉤の向きは左右拮抗するようになり、向きにはこだわらずに使用するようになったらしい。一方、中原側では、帯鉤は鉤を左にして使用するものばかりであり、対照的である。

内蒙古中南部の飾り帯

内蒙古中南部の北方青銅器文化は春秋中期に顕著となり、戦国時代を通して盛行する。当該地域では毛慶溝墓地をはじめ、帯金具の出土状態が良好に残り、飾り帯全体を復元できる例が多い。飾り帯は燕山地域と同様に帯留金具と帯飾で装飾する。帯留金具は鳥形鉸具が主体であり、戦国になると帯飾板が加わる。帯飾板は10×5cm内外の大きさで、多くの場合2枚セットで腰前を飾る。鳥形鉸具に比べて、より高位に位置づけられたであろう。2枚のうち使用者の左側のものには孔を持つ場合が多く、帯を止める機能を持ったと考えられるが、具体的な留め方は不明である。帯飾には波形飾や雲形飾が多く用いられ、多い場合は30点以上を用いる。この地域では戦国後期になると金銀製品が増え、帯金具にも金銀製のものが多くなる。金銀製品には鑄造品のほか薄板鍛造品もある。

甘寧地域の飾り帯

甘寧地域の北方青銅器文化は春秋前期ないし中期から顕著となり、戦国時代を通して盛行する。飾り帯は前2地域と同様、帯留金具と帯飾で構成され、多くの出土があるが、良好な出土状態が報告されるものは少ない。帯留金具は内蒙古中南部と同様、当初、鳥形鉸具が主体で、おそらく戦国時代に入るところに帯飾板が加わる。鳥形鉸具は意匠がバラエティに富み、内蒙古中南部との相違を見せる。帯飾板は、向かって右側のものには、その左端(2枚セットの内側)に左向き鉤と小孔がつき、これを有鉤帯飾板と仮称した。左向きの鉤と小孔の構成は基本的に鳥形鉸具と同じであり、鳥形鉸具と同じ使用方法を想定できる。鳥形鉸具と有鉤帯飾板には使用痕を残すものがあり、それらも検討に加えて、細い革ひもを鉤に掛ける使用法を復元した。

動物意匠の検討

帯金具に限らず北方青銅器文化の器物には、多くの動物文様が施されている。動物文様については早くから注目が集まり、さまざまに論じられてきている。ただし既往研究には、それぞれの動物がもつ固有の生物学的特徴を整理しないまま論じられたものが多く、混乱が見られる。本研究ではまず長城地帯に生息する哺乳動物の整理を行ったのち、器物の上の動物文様について考察した。結果、表現される動物種を絞り込むことができ、一部には同定も可能であった。具体的には家畜動物は少なく、ネコ科・シカ科・ウシ科の野生動物が中心であり、ウマ科・ラクダ科・イノシシ科が続く。

西溝畔2号墓出土の金製帯飾板には、トラとイノシシが闘争する場面を表現する。本来、イノシシは灌木が繁った場所、湿潤な広葉樹林や草地に生息することを好み、長城地帯の環境は生息域としては一般的でない。現に北方青銅器文化の器物でイノシシを施す例は

多くない。西溝畔2号墓の金製帯飾板は中原側の秦で製造された可能性が高く、農牧接触地帯における農耕民（秦）と遊牧民との接触の中で生まれた可能性が考えられる。

このように生物学的な知見を整理しつつ動物文様を分析することで、北方青銅器文化の飾り帯が秦・漢に及んだ意義に別角度から迫ることができた。

蛍光X線分析

現地調査した資料のすべてに蛍光X線分析を行った。調査はあくまでも表面分析であり、また対象資料の表面状況に大きく左右される。このことを考慮しつつ、分析と考察を行った。その中で、表面の状態が良好な西溝畔2号墓・碾房渠の金製品、西溝畔2号墓・石灰溝の銀製品（いずれも内蒙古中南部オルドス地域）では興味深い結果が得られた。

西溝畔2号墓・碾房渠の金製品は多くが銀：金 = 1 : 9 ~ 10 程度の組成にまとまる。これは、同じく北方系の甘肅省馬家ゲン墓地出土品が銀：金 = 1 : 5 ~ 10 程度とばらついているのと大きく異なる。一方、銀：金 = 1 : 9 ~ 10 の組成は、中原側の陝西省諸遺跡も同様であり、東周時代の金の標準値であった可能性がある。また金製品の中で、西溝畔2号墓の泡飾5点は、金 50%強、銀 40%強、銅 5%弱の計測値を示し、極めて特異である。一般的な金とは区別して作った別合金と考えられる。

西溝畔2号墓・石灰溝の銀製品は、一部の例外を除き、高純度にまとまっていることが確認された。これは甘肅省馬家ゲンの銀製品でばらつきが大きいのと明瞭に異なっている。ただし西溝畔2号墓の「天鵝形鉛飾件」と呼称されるもの2点は、実は主成分は銀であることが分かり、加えて鉛を 10 ~ 17% 検出した。現状では断定はできないが、銀鉛合金である可能性が高い。

以上のように、西溝畔2号墓・碾房渠・石灰溝の金製品・銀製品は、一部の際だった例外を除き、ある程度均一な金属組成を有している。3遺跡出土の金銀製品は、ほぼ同じ（あるいは非常に類似した）原材料を使用して製作されたと考えたい。

製作技術

現地での資料調査によって、既存の報告では十分に明らかにされていない裏面や断面を含めて、各資料の様態を詳しく観察し、製作技術についていくつか興味深い事例を確認した。

飾金具や帯飾板の鑄造方法については、西溝畔2号墓出土帯飾板などの裏面にある布目陽文から失蠟法が考えられる一方、西安市樂百氏 34 号墓出土の帯飾板の原型に湯道やハマリがあることから合範鑄造が合理的とも考えられ、複雑な様相を呈している。今回の調査では、小型の飾り金具の裏面の鈕（縫い付けるための環）に、アーチ形のものと同直

棒形のものがあり、直棒形のものとは蠟型などの代替造作技法で鑄造された可能性が高いことが分かった。また帯飾板の裏面の鈕には粘土細工のようなものがあり、これも代替造作技法による可能性が高い。このように鑄造品には代替造作技法によるものが多く存在すること、また器種によって合範法と代替造作技法とを使い分けていた可能性が高いことが分かった。

鍛造は主に金銀製品に用いられた。大きく金線品と薄板品とに分けることが可能である。今回の調査で特に注目されたのは、鑑付けの多用である。垂飾付耳飾の垂飾の鎖を金鑑に鑑付けしていたり、薄板を巻いて鑑付けすることで金線のような直棒を作ったりと高度な発達が見られる。

また、修復の技術も多様である。例えば碾房渠出土帯飾板は2つに破断したものを金線でつないでいるが、接合部を補強するために別の金属板で裏打ちをしている。蛍光X線分析を行った結果、補強用の金属板は銀を主成分とすることが分かった。

このように、製作技術は多様性をもって高度化しており、それぞれの技術の系譜を追えば、飾り帯の波及を跡付けられる可能性を見出した。

秦・前漢への波及

北方系飾り帯の秦・前漢への波及の胎動は、戦国後期（前3世紀）に求められる。この時期、中国北方を含む北の地域は匈奴が統一を成し遂げ、大帝國へと発展を始めた。副葬品に金銀器が増え、飾り帯には金銀製の大きな帯飾板を多く用いるようになる。一方、中原側で国どうしの抗争がいよいよ激化する中、北方に接する国ぐにはは強大化する匈奴は背後の大きな脅威となったであろう。西溝畔2号墓の長方形帯飾板は、匈奴懐柔のために秦が創作して贈ったものである可能性が高い。またこれに限らず、北方地域で金銀器が増加するのは、中原側の国ぐにが匈奴懐柔のために素材の形であるいは製品の形で金銀を贈った結果である可能性があり、蛍光X線分析の結果もそれと矛盾しない。このように、のちに秦・前漢に波及する飾り帯の原型が北方地域で完成する過程において、すでに中原側の影響が多面的に働いている。

北方青銅器文化が顕著化した春秋期以来、飾り帯は燕山・内蒙古中南部・甘寧のそれぞれで一定の独自性をもっていた。そのそれぞれがどのように変遷するのかを詳しく追う必要があるが、本研究では十分に明らかにするに至っていない。また本研究を通して、北方青銅器文化の飾り帯を十分に理解するためには、帯金具の構造や文様に加えて、製作技法や素材の問題、また使用法など、検討すべき項目が多岐にわたることが明らかになった。この観点からは、本研究で明らかにできたことは、その小さな一部に過ぎない。さらに、波及の先である秦・漢の飾り帯の様相

の追求も十分でない。今後はデータの収集方法も改善しつつ、さらなるデータの蓄積を行い、課題を克服していくことが望まれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

【雑誌論文】(計6件)

1. 小田木治太郎・廣川守・菊地大樹・王志浩 2015「中国北方青銅器の諸相 - オルドス地域出土品の検討から - 」『古事 天理大学考古学・民俗学研究室紀要』(査読無)第19冊 51~62頁
2. 小田木治太郎 2015「万里の長城を越える怪獣」『モノと図像から探る怪異・妖怪の世界』(査読無) 勉誠出版 108~132頁
3. 小田木治太郎・廣川守・菊地大樹・王志浩 2014「北方青銅器文化の金銀器 - オルドス地域出土品の検討から - 」『中国考古学』(査読有)第14号 143~165頁
4. 小田木治太郎 2014「燕山地域北方青銅器文化の帯留金具」『ユーラシアの考古学 高濱秀先生退職記念論文集』(査読無) 六一書房 81~95頁
5. 小田木治太郎 2013「長方形腰飾牌的出現及其変遷」『秦始皇帝陵博物院』(査読無)2013 308~315頁

【学会発表】(計8件)

1. 小田木治太郎・廣川守・菊地大樹「中国北方青銅器文化の金属器製作技術」日本考古学協会第81回(2015年度)総会 2015年5月23・24日 帝京大学(東京都八王子市)
2. 小田木治太郎・廣川守・菊地大樹・王志浩「オルドス地域の北方青銅器の新知見」日本中国考古学会 2014年度大会 2014年12月6・7日 広島大学(広島県東広島市)
3. 小田木治太郎「万里の長城を越える怪獣」第1回天理大学考古学・民俗学フォーラム “モノと図像から探る怪異の世界” 2014年7月5日 東京天理ビル(東京都千代田区)
4. 小田木治太郎・廣川守・菊地大樹・王志浩「オルドス地域の北方青銅器文化金銀器の新知見」日本中国考古学会 2013年度大会 2013年12月14・15日 駒澤大学(東京都世田谷区)
5. 小田木治太郎「矩形帯鉤の出現及其変遷」秦与北方民族国際学術研討会 2012年8月9日 秦始皇帝陵博物院(中国西安市)

【図書】(計1件)

1. 小田木治太郎・廣川守・菊地大樹・王志浩『東アジア飾り帯文化の生成過程』天理大学考古学・民俗学研究室 2015年 総124頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

小田木 治太郎 (ODAGI Harutaro)

天理大学・文学部・准教授

研究者番号：90441435

(2)連携研究者

廣川 守 (HIROKAWA Mamoru)

泉屋博古館・学芸課・学芸課長(学芸員)

研究者番号：30565586

菊地 大樹 (KIKUCHI Hiroki)

日本学術振興会特別研究員 PD(京都大学)

研究者番号：00612433

(3)研究協力者

王 志浩 (WANG Zhihao)

中国 鄂爾多斯青銅器博物館・館長)

楊 澤蒙 (YANG Zemeng)

中国 鄂爾多斯市文物考古研究院・院長

羅 豊 (LUO Feng)

中国 寧夏文物考古研究所・所長